

シイタケ原木の伐期についての考察

宮崎県林業試験場 日高 俊昭・近藤 一稔
伊藤 英彦・田中 勝美

I はじめに

最近ほど付向のためと称し極端な早期伐採（青葉伐り）や原木の乾燥が行なわれているが、これらも程度の問題であり、県の指導方針である適期伐採、適期接種の実証的な裏付けと、未だあまり調査されていない面の究明ということで、この試験を行なった。

II 調査のやり方

シイタケ原木（クヌギ、コナラ）を青葉伐りと、黄葉伐りに分け、各伐期に樹種ごとに10本ずつ伐採した。伐採した原木は、枝葉をつけたまま放置し、伐採日から一定期間おきに玉切り、原木の部位（根元部、中間部、上部）および材部（樹皮部、辺材部、心材部）別に水分の測定を行ない、接種後の菌糸の伸長を調査した。

1. 原木伐採の場所

宮崎県西諸県郡野尻町諸県県有林3林班
標高200m, 方位南西～北, 傾斜0～5。

2. 樹種および樹齢

クヌギ 10年～22年
コナラ 11年～23年

3. 伐採

- 1) 青葉伐り 48.10.29 クヌギ, コナラ各10本
- 2) 黄葉伐り 48.11.27 クヌギ, コナラ "
4. 玉切り 長さ 1.0m
クヌギ, コナラとも伐期別にそれぞれ玉切りした。
 - 1) 伐採当日 1本
 - 2) 1週間おきに 3本
 - 3) 2) 終了後から10日間おきに 3本
 - 4) 3) 終了後から1カ月おきに 3本
5. 接種

玉切りの都度、県901号（丸棒型）を接種しヒノキ林内に百足伏せした。

6. 含水率の測定

各部位を約2cmの厚さに2箇所ずつ輪切りで採材し、1箇所は輪切りのまま、他の1箇所は樹皮部、辺材部、心材部に区分し、赤外線水分計で測定した。

III 調査結果と考察

伐倒した原木水分の推移は図-1のとおりであった。種菌の活着は80～90%以上で特に伐期、玉切り時期による差は見られなかった。菌糸の伸長については、49年7月29日に樹種別、伐期、玉切り時期別に、それぞれの元玉をばく皮調査した（図-2参照）。これによるとクヌギは青葉伐りより黄葉伐りの方が菌糸の

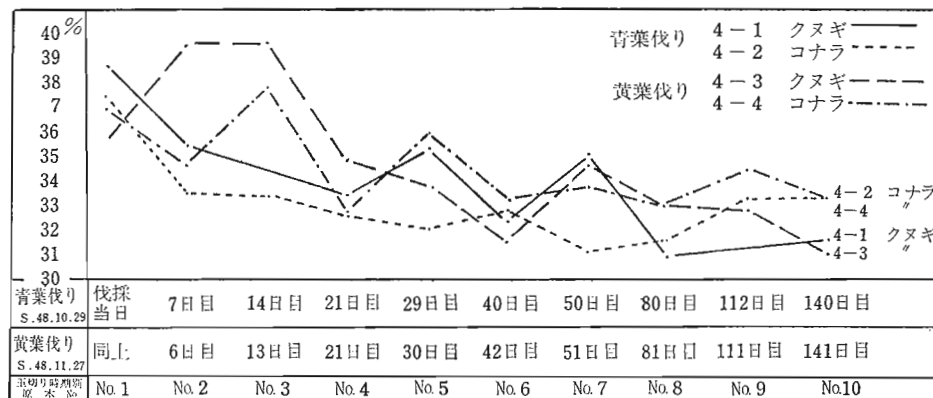
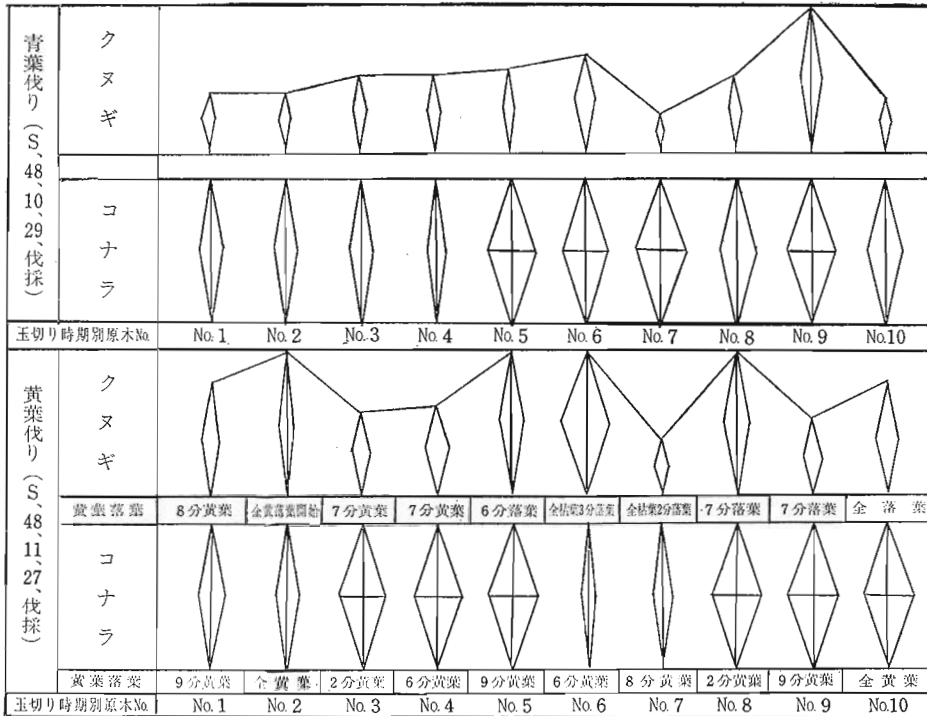


図-1 辺材部の水分の推移



図一 伐期玉切り樹種別、駒1箇当り菌糸伸長模式図

！ 線のあるものは菌糸が伸長して、上下に接種してある駒の菌糸と合併しているもの。
 註 + とあるのは、菌糸が伸縦長して、横共に隣接の菌糸と合併しているもの。

伸長が良く、コナラもやや黄葉伐りの方が良かった。また、コナラとクヌギとでは、コナラの方が良く伸長していた。菌糸の伸長に影響が大きいと考えられる辺材部の含水率と菌糸の伸長の関係は、この調査では判然としなかった。害菌はヌルデタケ、ダイダイタケが僅かに発生していたが、伐期、玉切り時期との関係は見いだせなかった。

以上のことから青葉伐りが特に優れているという確証はえられなかった。逆にもう少し青葉伐りの時期を早めた場合、樹液の流動期による樹皮のはく離等が考

えられる。いずれにせよこの調査結果から言えることは、原木伐倒の時期および玉切りから種菌接種の期間には相当の中があると共に、種菌の活着、菌糸の伸長に関する因子は、種菌接種時の原木水分のみではなく、伐倒～伏込地の環境条件とその後の管理に大きな因子が存在すると推測される。今後の調査項目としては、

1. 伐期、玉切時期別による子実体の発生量比較。
2. 同上別による害菌発生率の比較、等があるが、このことについては後日報告の予定である。